

風土記の丘の花だより²⁵⁵

今、そしてこれから見られる植物(2024年10月5日)

10月だというのに、日ざしの下では汗ばむ事もあります。でもさすがに日陰にいと、秋の風を感じます。253号でチラっと紹介したイヌコウジュですが、群生地に行くと、時すでに遅し、



きれいに草刈りをしてくださった後でした。でも旧小早川住宅の上でわずかに生えているのを見つけたので、紹介します。「ヒメジソとそっくりです」と書きましたが、確かにそっくりですね。それでは、簡単な見分け方を紹介しましょう。左の小さな写真をご覧ください。それぞれの花の萼(がく)を写しています。上がイヌコウジュ、萼が細く尖っています。下がヒメジソ、同じく3つに分かれていますが、尖っていません。他にも色々違いはありますが、これが一番わかりやすい区別点だと思います。



いろいろなハギが咲いていますが、今回はニシキハギを紹介します。園内で一番多く植えられているハギです。マルバハギより花序柄が長く、かといってヤマハギほどでもなく、花の色はツクシハギのように白っぽくありません。そして、枝は多少枝垂れますが、ミヤギノハギのように地面すれすれになることはありません。ややこしかったら、全部ひっくるめて「はぎ」でいいでしょう。興味ある人は区別する。それほどでもない人は、それなりにハギの花を楽しんでください。



タデも秋の花です。いろいろなタデが咲いていますが、少し湿った所が好きなボントクタデを紹介します。これは万葉植物園の水生植物のコーナーで撮影したものです。細い花柄が湾曲して伸び、そこに小さな赤と白のプチプチが付いているように見えます。白い方をよく見ると、小さな花びらが見えます。赤はこれから開くところです。ボントクとは、ピリっとせず、ぼーっとした人のことだそうです。このタデが、ピリっと辛くないことから名付けられました。万葉植物園でオケラが咲きました。今年は草刈りの時期と重なってしまい、つぼみを付ける前にほとんど刈られてしまったので、それを免れたわずかな株だけが、花を付けてくれました。野外でも所々で思いがけず見つかることがありますので、気にしながらお散歩を楽しんでください。名前は少し間抜けな響きですが、とても珍しいキク科の植物です。万葉のころは「うけら」と呼ばれ、「恋しけば 袖をも振らむを 武蔵野の うけらが花の 色に出なゆめ」の歌がよく知られています。



松下